

處より歸る名を伏拜といふ也、諸人此處より拜して、歸るによつて其名あるにやかの釣橋を越、だんく難處の雪をふみわけて、五里ほどゆけば、又壁を建たるごとくなる處あり、それを一里計升、其上に立山權現の本社あり、九尺二間南向なり、中尊は寶藏ばさつ、左り彌陀如來、右不動明王也、此處より東の方に日光見ゆる、南の方に信州淺間山、飛州乘鞍山見ゆる、當山開基の慈興上人大寶元年より元文五年迄、千四十有餘年に成といふ、此處の寶藏に寶物種々あり、山中に一里ほどの湖水有、此邊より温泉涌出る、これを立山の地獄といふ、參詣の人を迷はし錢を出さしむる、また山中に鶴と云鳥あり、雉子の鳩鳥に似て、とさか有、美き鳥也、此山の名鳥なりと云、立山の險難なること、富士に十度登るよりは、立山江壹度のぼるかた甚だ辛勞すと云り、廻國の僧も、山上まで行とまる者百人に一人もなしと云、六月十日より、同十四日迄予此山中に居ること有、今年の時候例年と違ひ、暑熱よわきかたに覺ゆ、此節山上雪ふかきこと四五尺有、水を求るには雪を器に入、そを焚解して水とす、霧強くして甚だ水冷也、煮ものにへがぬる故、食物は糒團子やうのもの外用ひがたし、甚だ險難の地也、彼ふるき雪例年酷暑の節は、一日のうちにも消ること有といへり、

〔萬葉集十七〕立山賦一首并短歌

安麻射可流比奈爾名可加須古思能奈可久奴知許登其等夜麻波之母之自爾安禮登毛加波波之母佐波爾由氣等毛須賣加未能宇之波伎伊麻須爾比可波能曾能多知夜麻爾等許奈都爾由伎布理之伎底於婆勢流可多加比河波能伎欲吉瀨爾安佐欲比其等爾多都奇利能於毛比須疑米夜安理我欲比伊夜登之能播仁余增能未母布利佐氣見都々余呂豆餘能可多良比具佐等伊未太見奴比等爾母都氣牟於登能未毛名能未母伎吉底登母之夫流我禰多知夜麻爾布里於家流由伎乎登己奈都爾見禮等母安可受加武賀良奈良之